

NLS シラバスシステム:コース管理プラットフォームとその投票サブシステムの利用

角田篤泰[†] 養老真一[‡] 松浦好治[†]

[†]名古屋大学大学院法学研究科 [‡]大阪大学大学院法学研究科

本報告では、名古屋大学法科大学院における教育・学習活動の中心的なCMSプラットフォームである、「NLS シラバスシステム」とその利用について紹介する。このシステムは、先行研究である、名古屋大学高等教育センター開発の「ゴーイングシラバス」の設計理念に基づき、法科大学院の教員からの要求機能を加えたシステムである。これらの機能のうち、特に、このシステムに組み込まれた投票サブシステムを用いた教育方法も紹介する。これは、Webを通じて提出されたレポートを学生が匿名で相互レビューし、投票することにより、他者の考え方や表現に触れ、思考力や記述力を養うことを目的とする。また、NLS シラバスシステムには新たに「メール型掲示板機能」と呼ばれる機能が導入され、学生と教員が一对一でメッセージ交換可能になり、通常の電子メールよりも利便性が高まるケースもある。法科大学院の教員によれば、本システムの導入に当たっては、FDや教員の相互連携など組織的な活用が重要であると報告されている。

NLS Syllabus System: Using a Web-Platform for Course Management and the Voting Subsystem

Tokuyasu KAKUTA[†] Shin-ichi YORO[‡] Yoshiharu MASTUURA[†]

[†]Graduate School of Law, Nagoya University

[‡]Graduate School of Law and Politics, Osaka University

This paper reports NLS Syllabus System and the operation. The system is a main CMS platform used in Nagoya University Law School. We have developed the system based on the design concepts of Going Syllabus, as a previous work, developed by Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University. In addition to the basic functions, our system has some additional functions required by teaching staffs of the law school. Especially, this paper also shows our proposed instruction using the voting subsystem built in our system. The aim of the subsystem is that students contact thoughts and representations of the other students and improve their thinking and writing skills by peer-reviewing many reports submitted through the Web interfaces and by voting on the reports. Furthermore, a new function called "e-mail-like BBS" is introduced into NLS Syllabus System. This function allows students and teachers to exchange their messages one-on-one through the BBS. In some cases, using the BBS is more convenient than e-mail. According to the reports from the staffs, the key point to introduce and operate the system is the organized utilization based on FD and close coordination of teaching staffs.

1. はじめに

本稿では、2004年4月より開校された名古屋大学法科大学院(以降、名大LSと略す)において利用されているNLS シラバスシステム(Nagoya University Law School Syllabus System, 以降、NLS3と略す)とその投票サブシステム(以降、投票SSと略す)について紹介し、運用状況を報告する。これらのシステムは、名大LSでは、すべての講義の起点になっており、法科大学院生は毎日このシステムにWebを通じてアクセスし、各講義の状況を確認し、予習・復習に努めている。

その意味で、このシステムは名大LSにおけるコース管理のプラットフォームであると言える。次節以降では、これらシステムの研究開発の背景とともに、利用局面に沿った機能概要と運用状況について報告し、その後、若干の議論を行う。

2. NLS3の概要

2.1 開発の背景

NLS3の開発の基となったシステムは、名古屋大学の高等教育センターで開発された、ゴーイングシラバス(以降、GSと略す)である。この開発グループの文献

[4]

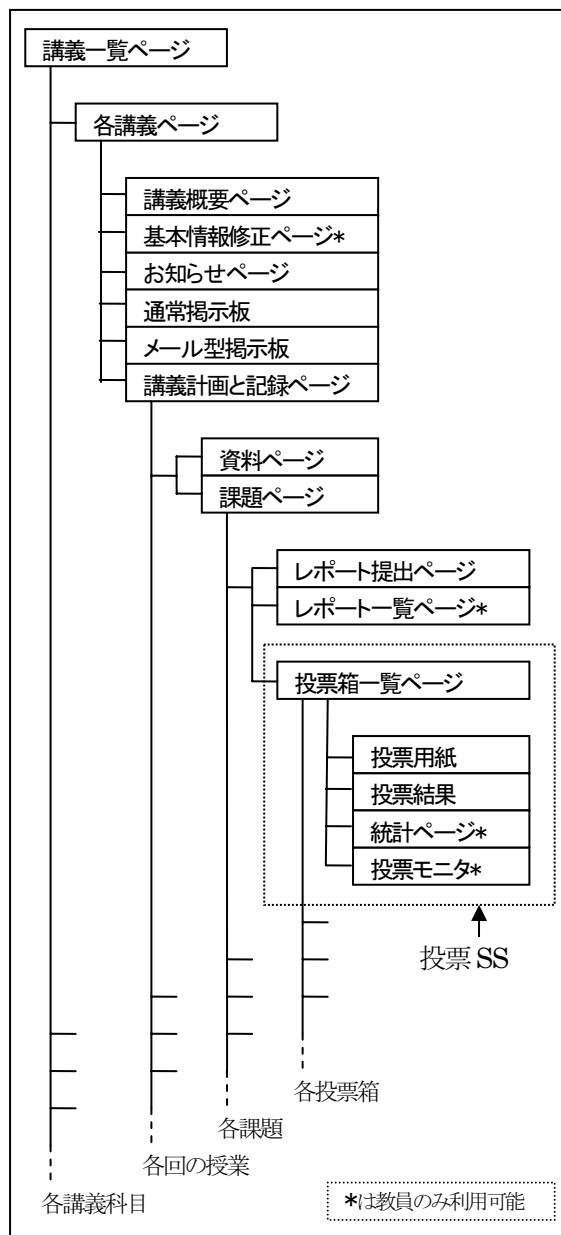


図 1 NLS3 の機能構成図

によれば、もともと同センターでは名古屋大学の教員へ向けた授業改善のための提言を行っており、それがGS開発の契機になっていた。その提言によれば、授業の全体像をまず先にデザインすること、シラバス設計法の習得、シラバスに沿ったコース管理、および、シラバスに掲げた目標達成についての自己評価と新たなコース設計への反映、等が秘訣とされた。こうしたシラバス中心のコース設計を助け、そのFD(Faculty Development)支援のためのIT環境を提供することがGS開発の目的であった。さらに、GSの設計に当たっ

て、GSの操作部分については、上記コース設計力の視点に加え、さらに、①シラバスの構造化、②コミュニケーションの活性化、③授業ポートフォリオの導入、という3つの基本機能の視点が重視された。

そこで、NLS3設計に当たっては、これらGSのコンセプトの継承に努め、運用に当たっても強力なFDの推進を前提とした。従って、GSが有していた、次に示す基本機能はそのまま継承されている。

- ・シラバス基本情報の提示・編集
- ・各回の講義計画と記録の提示・編集と各回の講義資料の提供
- ・掲示板機能

なお、NLS3の開発以前から既に、法科大学院の担当教員にもGSの利用経験者がおり、GSに対して次のような機能拡張の要望が出されていた。

- ・レポート提出に利用したい
- ・掲示板の数を必要に応じて増やしたい
- ・開講されている全部の講義を一望したい
- ・協力校にシステムを簡便に配布したい(法律面・メンテナンス面)

そこで、NLS3は、GSから継承した基本機能に加え、これらの要求を具備するように設計された。

さらに、本稿の後半で紹介する投票システムについても、従来、独立した別システムとして稼働させていたものだが、これをNLS3からシームレスに利用できるよう、強い要望が出されており、サブシステムとして新たに再構築し、NLS3に組み込んだ。

2.2 基本機能と利用例

2.2.1 典型的な利用の流れ

NLS3の典型的な利用の流れに沿って、以下に基本機能を紹介する。なお、これら機能の構成は図1に示す。NLS3の画面例については図2に示す。

- 1) NLS3にアクセスすると、まず、講義一覧の画面が表示され、その中で教員ならば自分の担当講義を選び、学生ならばアクセスしたい講義を選び、各講義のページに移る。この「講義一覧」ページでは、最近更新があった講義の欄にはマークが付されているので、内部の変更をここで先に知ることができる。
- 2) 教員は、各年度の講義開始までに、あらかじめ、担当講義のシラバス情報と全ての回の講義計画をNLS3に書き込んでおく。担当教員名、講義時間、教室、単位数等の基本情報は「基本情報の修正」ページへ、講義のねらい、到達目標、成績評価方法、教科書参考書等の情報は「講義概要」ページへ、各回の講義計画の内容については「講義計画と記録」のページへ、それぞれ書き込む。
- 3) 教員は各回の講義で利用する資料や出題する課題に

については、全ての回の講義計画を表形式にした「講 通常の掲示板で、学生も書き込むことができる。学

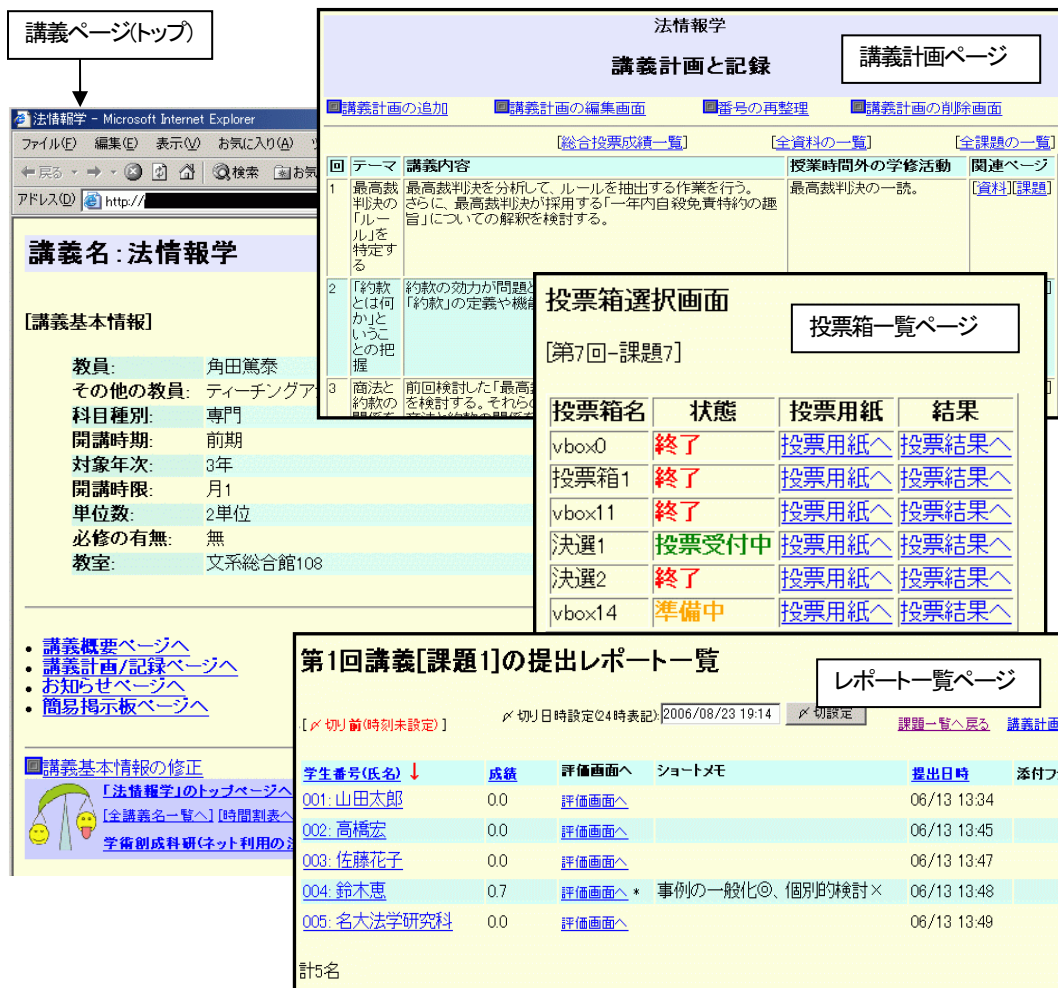


図2 NLS3の画面例

義計画と記録」ページから、各回の「資料」ページや「課題」ページに移って操作する。

- 4) 学生は毎回の講義を受講する際、講義計画のページを見て、講義の予習や課題提出を行い、必要に応じて資料をダウンロードする。
- 5) 学生が提出した課題レポートについて、教員は「レポート一覧」ページから容易に閲覧、コメント返信、採点等を行うことができる。

2.2.2 掲示板機能

NLS3はいくつかの掲示板機能も備えている。これらを紹介する。

(1)「お知らせ」ページ

教員のみが書き込める、お知らせ専用の掲示板ページである。

(2)通常掲示板

生間の情報交換等に利用される。添付ファイルも可能である。この掲示板は、教員が必要に応じていつでも作成することができる。匿名であるが、ハンドルネームを付すこともできる。管理者だけには誰が書き込んだか分かるため、事前にその旨学生に伝えておけば、誹謗中傷等の書き込みはほとんどない。このタイプの掲示板は、しばしばブレイクストーミング的な利用がなされる。さらに、ユーザ ID によるクローズド機能も備えている。たとえば、このクローズド機能によって、実際に、グループ対抗のディベートの際に、グループ内だけの戦略的な相談に利用されていた。

(3)メール型掲示板機能

これは、1 学生と教員が 1 対 1 でやり取りするための掲示板である。Web メール感覚で利用できるため、こう呼ぶことにした。このメール型掲示板を利用してレポートを添削しながら、徐々に修正していくことも

可能であり、実際にそのようにも利用されている。また、教員側は何人でも参加できるので、1人の学生を複数の教員やTAで指導することも可能である。この機能について補足説明させて頂くと、もし、このメール型掲示板機能でなく、実際のメールで学生とやり取りする場合は想像して頂きたい。自分のメールソフトでこれらメールを受けると、様々な講義の様々な学生のメールがランダムに到着してくる。一人の学生とやり取りしようとしても、どんどん他の学生のメールや、そもそも普通のメールも届き、学生ごとのやり取りの履歴などが混乱してしまう。もちろん、講義ごと、学生ごとにフォルダを作れば対応できるが、その手間は馬鹿にならない。さらに、その学期が終わればほとんどの場合そのフォルダは利用されなくなる。しかしながら、このメール型掲示板機能を使えば、自動的に講義ごとの学生ごとに掲示板が用意されるので、その手間はなくなる。さらに、メールのように1メッセージずついちいち開かなくとも、掲示板なので、最初から時系列にメッセージが並んでいるため、一目で話の履歴を追うことができる。この機能は利用者からの評判も良い。ただし、先に、学生に利用させる意図を指示しておかないと、返事を期待して、どんどん書き込む学生がおり、注意が必要である。なお、メール型掲示板にメッセージが到着している場合には、講義一覧ページの該当講義のところにメールのアイコンが表示されるようになっている。

2.3 特徴

本システムにおいて、特徴的な点は次の通り。なお、2.1及び2.2で紹介した機能以外についてのみ示す。

- 他の教員ともお互いに講義ページを閲覧し合える。共同作業や緊張感持続に役立っている。FDを意識した作りになっており、名大LSにおいては、実際に、民法法系の教員同士が異なる講義において、互いの進行状況を前提にしたり、題材の共有化を図って、法曹実務に必要な多角的な視点で講義を進めている。
- 直接資料をアップロードしておく以外に、リンクも登録できる。著作権の関係で、NLS3サーバに資料を置けない場合など便利である。また、URLをキーボードから入力させることも不要になる。これはGSから継承した機能である。
- 先頭の講義一覧ページには、自分が表示したい講義だけを一覧表示するためのブックマーク機能がある。
- 講義ごとに更新履歴ページを持つ。更新時に自動的に登録される。
- 講義中に板書代わりに、テキストとして直接書き込んで、そのまま資料にしたい場合など、テキストの

直接書き込み機能が使え。これを利用すれば、いちいち一旦ファイルにしてアップロードする必要がなくなる。

- 資料ページに提示される資料のうち、テキストファイルであればWeb上で直接編集できる。
- 課題や資料には学生に対して、可視・不可視の設定ができる。これにより、先に何週間分か、あるいは当該年度の全部の回の資料を先にアップロードしたり、課題を作成しておき、各回の講義前あるいは講義中等に、必要に応じて学生に見せることができる。その他の実例としては、この機能を利用して、教員の講義のメモを残したり(次年度以降に向けての一種のポートフォリオになり便利)、複数教員で講義をしている場合には、それぞれの教員の担当部分の講義記録や連絡用に利用している。

2.4 実現

本システムは、Zopeという、コンテンツ管理機能を内蔵したWebサーバ・システム上ですべて実現されており、そのコンテンツとしてプログラムファイル群をアップロードするだけで動作する(ただし、コード変換のアドインソフトの組み込みや、Zopeのバグを避けるパッチ等はZope本体に組み込む必要があるが、当方でその点のマニュアルを整備しているので簡単に対処できる)。

Zopeの利点のうち、本システムの開発・運用上、有効であった主な点は次の通りである。

- Web画面からプログラムやコンテンツを直接操作できる。
- HTMLを適当な部分に分断して管理できるので、モジュール化や再利用が簡便になる。
- ユーザ管理や設定が構造的で詳細に行える。
- サーバのOSのファイルシステムとは独立したコンテンツ管理のため、OSのファイルシステムを使用する類いのセキュリティホールが攻撃されることはない。

設計に当たっては、初心者が、考えたり、迷ったりしがちな選択肢を極力削り、典型的な利用法についてはデフォルトのまま、目に付くボタンやリンクをクリックすれば先に進めるようにした。さらに、画面ソースの作成についても、Webデザインツール等は一切用いず、HTMLの基本機能のみで、JavaScriptやCSSをも利用していないため、画面表示が軽快になった。

3. 投票SSの概要

3.1 開発の背景

名古屋大学法学部では、既に2002年度より、法情報学関連の講義を中心に、投票システムを利用した講

義を展開していた。当時の投票システム(以降、「旧投票システム」と表記する)は、現在の投票SSに比べると機能的に制限があったが、その本質的な機能、すなわち、課題の提示機能、学生レポートの提出機能、匿名による相互レビューおよび投票機能は、そのまま継承されている。現在の投票SSは、旧投票システムのユーザの要望を基に機能拡張を施したものである。

なお、このような投票システムを教育ツールとして、少なくとも日常的に利用する研究はほとんど見当たらない。従来、投票ツールを教育に持ち込む場合があっても、多くは民主的な選挙の教育が対象の研究、あるいは、一部に、教育評価のアンケート収集ツールの研究[3]が存在するだけであった。

3.2 基本機能と利用例

3.2.1 典型的な利用の流れ

投票SSの典型的な利用の流れに沿って、以下に基本機能を紹介する。

- 1) 教員は、学生に対し課題レポートを提出させた後、一旦締め切る。レポートに対して、いくつでも添付ファイルを付加する機能があるので、レポート本体のテキスト文だけでなく、プレゼン用ファイル、表計算ファイル、画像ファイル等も提出可能である。
- 2) この状態で、投票箱作成画面に移り、それら提出されたレポート群を候補とする、**仮想的な投票箱**を設置する。この投票箱はいくつでも作成可能である。たとえば、一番優秀なものを選ぶための投票箱、逆に、一番まずいと思われるものを選ぶための投票箱、あるいは、教員のコメントの後に再選を行うための投票箱等、選ぶ観点をいくつも設けて、それらごとに投票箱を設置することができる。
- 3) このようにして仮想的投票箱を設置した後は、学生はそれら投票箱の一覧画面に移り、投票箱ごとの投票用紙画面や投票結果画面に移っていく。
- 4) 学生はその投票用紙画面で、指定に従って何れかを選んで投票する。この画面では候補となっているレポートを閲覧できるが、それらは**匿名化**されており、誰のものかは分からない状態でレビューし、投票する候補を選ぶ。現在、デフォルトでは、「1番のもの」と「2番のもの」を選ばせている。注意すべきは、特に1番「良い」とは限る必要はなく1番「悪い」ものでもいい。投票箱ごとに決めて事前に指示すればよい。
- 5) 教員は投票モニタ画面に表示される投票率等を参考に、適当な時期に投票を締め切る。

¹旧投票システムは[加賀山らの著作[2]]の付録 CD-ROM に収録されている。

6) 締め切ると同時に集計され、学生は投票結果を閲覧できる。

7) 教員は各投票箱の詳しい統計情報や、全部の回の全投票箱の結果を集計した統計情報なども閲覧できる。基本的に、集計結果は、各グループ内での順位、獲得ポイント、ヒット率である。順位は獲得ポイントの順である。獲得ポイントはデフォルトでは1番と2番を選択する方式なので、単純な得票数ではなく、順位に合わせて重みを乗じている。現在のところ、1番のポイント1票につき2ポイント、2番は1ポイントとして計算している。特徴的なのは「**ヒット率**」の算出である。これは、いわば「どれだけ勝ち馬に乗って、投票することができたか」という鑑識眼の目安となる率を算出したものである。直観的に言えば、1番目と2番目に選ばれた候補の得票ポイントの総和を100%と考えたとき、ある学生が投票した候補の総和がその何%に当たるか、というものである。こうすると、1位を選べていなくても、比較的得票数の高いものを選んでいれば、それだけヒット率は高くなり、ピッタリ当てていれば100%となる²。

3.2.2 グループ化

本システムでは、投票方式としてデフォルトでは「グループ化」という指定になっている。これは、全員が全員のレポートを互いレビューして投票するのではなく、7つ程度の候補ごとにグループとなるようにランダムに区分し、学生は自分に割り当てられたグループのレポートのみを閲覧・投票する方式のことである。自分自身は含まれないようになっている。このようにグループ分けする利点は、レビュー時間の短縮はもちろんであるが、講義中の限られた時間内に集中力を維持させて学生にレビューさせるためでもある。履修者が少数の授業ならいいが、20人分程のレビューでもかなり辛いようである。

3.2.3 講義中の添削

講義中にレポートの添削を行う場合、限られた講義時間であるから、全員のレポートをその場で添削することは困難であるし、重複する指摘も多くなり効率的でない。そこで、いずれかをサンプルとして選出せざるを得ない。この時、ランダムな指名とは異なり、多少とも合理的に選びたい場合、本投票機能が役立つ。学生は、他人のレポートをいくつか見るうちに、明ら

²現在のところ、ヒット率は正確には次のように算出している。投票者*v*が*N*位として投票した候補の獲得ポイント*P_v(N)*、実際に*N*位になった候補の獲得ポイントを*P(N)*とし、*M*位まで投票する方式を選んだとすると、ヒット率 = $(\sum P_v(i) \times 100) / \sum P(i)$ である。ただし、 $1 \leq i, j \leq M$ 。

かに自分だけズレていたとか、ケアレスミス・知識不足などを発見する。優秀なレポートを書く者は、他から学ぶことが相対的に少なくなるが、そこで投票によって、その優秀者が選出される可能性が高くなるため、教師はその選ばれたレポートについて添削を行うだけで、多くの場合、その優秀者へのアドバイスになる。また、なぜ、いいレポートなのかを他の学生に説明するためにも、都合のいいサンプルとなる。場合によっては、一番悪いものを選び、徹底的に添削する、という方法も可能である。いずれにせよ、このような学生レポート群に対して、緩い構造化を行うことになり、少しでも合理性や効率性の向上に寄与できる。

3.2.4 匿名による相互レビュー(ピア・レビュー)

これは、学生によるレポート提出後、投票箱を設置しても投票はさせずに、他人のレポートや作品をレビューさせるだけに留める、という利用方法である。投票時や投票結果表示の際には、各候補のレポートは匿名化されているので、そのまま、匿名による相互レビューができるのである。3.2.3でも言及したように他人のものを見るだけでも十分学習になり、学生の満足度も大きい(詳細は4.3節参照)。

なお、しばしば指摘される、学生同士のピア・レビューの問題点として、他人からコメントを得るとそれをそのまま利用した修正レポートが増えるという問題がある[1][7]。しかし、本システムの利用局面では多くの場合、他人のものを参考にさせているだけなので、この問題は顕在化していない。いずれにせよ、実務法曹の養成や学部での法学教育では、オリジナリティの高い論文のようなレポート作成を目指しているわけではなく、投票機能や掲示板などを使って、標準的に見て、優れているものや多くの賛同を得られるものとはどういうものか、あるいは逆に、多くが問題視するのはどういふ場合か、このような点を学び生かすことが重要であり、他のピア・レビューの研究の問題設定とは状況が異なっているのかも知れない。

3.3 特徴

投票SSのその他の特徴的な機能を列挙する。

- ・**決勝一ナメント機能**。各グループの1位のレポートだけを候補とする投票ができる。
- ・投票中に投票率のモニタリングが可能(手動更新)。
- ・投票用紙を使って、他人のレポートにコメントを書き込める。

3.4 実現

投票SSは、NLS3のサブシステムとして実現されているので、開発環境、運用環境とも全く同じである。

現在のところNLS3と不可分な形で配布・提供される。

4. 導入・運用状況

本システムの導入状況、運用状況、アンケート結果について順に示す。

4.1 導入状況

NLS3は、名大LSにおいて、教員・学生が日常的に最も頻繁に利用するシステムである。各講義の資料の提示、課題提出、お知らせ等は全て、基本的にNLS3を通じて行われている。このような運用状況は開校の2004年4月以来続いている。なお、このNLS3は、鹿児島大学法科大学院に2005年度4月から、南山大学法科大学院に2006年度4月からそれぞれ導入されている。

NLS3は基本的に無償で配布されるが、無許可での再配布および開示の禁止、無許可での修正の禁止、等の制約を受ける。現在、ソフトウェア自体を配布するのではなく、サーバ管理ごと名古屋大学の法学研究科で引き受ける形態も模索中である。

なお、NLS3の英語版も既に運用されており、留学生を中心とした講義やプロジェクト等で使用されている。

4.2 運用状況

本システムはFDを強く意識したシステムであるので、少なくとも名大LSでは、全講義科目について利用され、全教員、全学生が組織的に利用している。具体的には次の通り。

- ・調査対象: 名大LS用サーバ (2005年度)
- ・科目数: 125 (118開講)
- ・学生ユーザ数: 160
- ・教員・TAユーザ数: 125
- ・アクセス頻度: 年間約 266.8万回
(1人1日平均約 25回)
- ・投票を利用した講義: 17

この他、学部での講義科目、「法情報学1~4」や法情報学関連の大学院での講義科目などで利用されている。法情報学4は、大阪大学法学部、鹿児島大学法学部、および熊本大学法学部の法情報学(論)の講義と連動しており、それぞれの大学の学生も利用している。2005年度は、この講義については、全大学を合わせて約130名が履修し、そのほとんどが最後まで参加していた。なお、これらは別サーバで運用している。

4.3 アンケート結果

全員PCを利用する環境で講義を進めている「法情報学1」の2006年度前期最終講義において、80人の

受講生に対して、NLS3 と投票 SS について、簡単なアンケートを実施したので、結果を報告する。

まず、学生に対し、このようなネットを通じたシステムを利用しながら講義を行うことについての回答は、次の通りであった。

- ・利用する方がいい: 74 人
- ・利用しない方がいい: 4 人
- ・わからない: 2 人

9割の学生は、このような環境を望んでいる。文科系でもあるし、質問の意図の理解との関係で、全ての学生とまではいかなかったが、学生のニーズの高さは明白であろう。反対派の意見は「人間味がない」であった。肯定的派の意見は、「スムーズである」「自宅から提出できるので便利」「紙資源保護に有効」であった。

次に、匿名化の是非について学生にアンケートを取った結果は次の通りであった。

- ・匿名の方がいい: 78 人
- ・記名の方がいい: 2 人

匿名派は「オフラインでの友人関係を意識するから」「公平・平等に選べる」「恥をかかない」等であり、記名派は「恥をかく方が勉強になる」というストイックな見解であった。

最後に、相互レビューの賛否については、次の通り。

- ・相互レビュー賛成: 79 人
- ・相互レビュー反対: 1 人

賛成派のコメントしかなく、「見落としが分かる」というものであった。

5. 議論と課題

NLS3 と投票 SS に関する、いくつかの論点について議論と課題を示す。

5.1 組織的な運用

NLS3 は FD 活動を前提としたシステムであり、教員相互に講義内容を閲覧する機会を与えるために、担当外の講義ページでも教員は相互に閲覧・利用できる。2005 年に名大 LS が主催したシンポジウム[5]での報告によれば、このような環境を活用して、民事法系の教員同士では、他の教員の進行や教材に合わせて、自分の担当講義を進めている。こうすることで実務法曹の技能に必要な多角的な見方で法律問題や事例にアプローチさせることを目指している。なお、本来 FD とはファカルティの組織的な協調作業も意図されていたはずであり、NLS3 の利用によって本来の FD の姿に近づいたとも言える。

さらに、組織的な運用という支えがあって NLS3 は安定的で円滑に機能していると言える。このようなバックボーンとしては、主に次の3点が挙げられる。第

1 に、学生全員がノート PC を持ち込み利用することを前提とし、入学時やそれ以前から IT 関連のガイダンスを入念に行い、さらに、法科大学院の学生の活動空間では、すべて無線 LAN が利用できる点である。

第 2 に、学生達自らが組織する IT 委員なるものによって、学生クライアント側の利用のノウハウの伝達などが円滑に行われている点である。第 3 に、教員クライアントが側のサポート体制も、法学研究科の情報担当の講師などが窓口としてトラブル対応を受けている他、各教員はそれぞれ TA 等のサポートにより、資料のアップロード、課題出題、課題レポートの添削、等を行っている点である。

NLS3 のようなシステムを導入する際にも、依然として、このような運用面のサポート労力と導入後のメリットのトレードオフを考慮する必要がある。

5.2 投票 SS 利用の留意点

法科大学院の担当教員の見解や利用状況に基づくと、投票 SS を利用する場合には、次の点が留意事項となるであろう。

- ・いいものを選ぶツールではなく、他人のものを実際に見る機会と、そのインセンティブを与えるものと割り切る。そもそも投票自体がどれだけ投票者集団の意志を反映しているかという点については様々な問題点が指摘されている[6]。学生の能力の目安として、どれくらい投票結果を取り込むかは程度問題であり、直ちに成績に反映することには慎重である方がよい。
- ・出題するレポート量は短めで、長くても数百字程度が適当である。あまり長いものであると、レビュー時に集中力を欠く上、選択基準の多様性も顕著になり、うまく選び切れないようである。実際、筆者らも、要旨をまとめる作業、議論の組み立てを記述する作業、アイデアを列挙する作業など短めのレポートに対して投票を利用することが多い。それ以外は、匿名相互レビューだけでも有効である。
- ・投票時、学生は選択に迷うと、読みやすく、短めのレポートを選ぶ傾向がある。読みやすく記述する表現力も大事だが、内容が伴わなければ意味がないので、教員はこの傾向に留意しなければならない。
- ・獲得ポイントとヒット率の相関はほとんどなさそうである。直観的には、いいものを書く能力といいものを鑑定する能力は別である、と言えるかも知れない、ということである。これは、現在、非常に大雑把ではあるが、2002 年度から 2004 年度までの全投票データ(約 18,000 件の投票用紙レコード)を対象に単純に相関を算出した結果である。ただし、様々な条件を考慮すべきであるし、そもそも投票というメ

カニズムが潜在的な相関関係を相殺している可能性もあるため、現在さらに詳細に調査中である。

5.3 メール掲示板やレポートコメントの効用

教室において他の学生達の前で、特定の学生に「声かけ」をするのは、日本の文化ではあまり効果的ではないかも知れない。しかし、学生というのは、自分が教員から関心を持ってもらっているという実感があると、信頼関係が築きやすく、マスプロ講義であっても積極的な授業参加態度になるようだ。そこで、少なくとも学生の意識を講義に向けさせるには、メール掲示板やレポートのコメント機能は有効なツールとして機能する。また、フィードバックも速くなり、講義の修正や補足も円滑になる。

6. まとめ

本報告では、NLS3 と投票 SS について紹介し、運用状況を報告した。NLS3 は、基本的に、GS のコンセプトを継承し、掲示板機能の拡張とレポート提出機能を加えたものであると言える。さらに、投票 SS としての投票機能をも加えている。掲示板機能の拡張については、メール型掲示板機能を提供し、通常のメールを使った授業進行より効率化を図っている。

本システムは、要求されていた機能を実現し、安定運用されているため、教員・管理者から一定の満足度は得られている。また学生アンケート等からも、このようなシステムを授業へ導入すること自体への満足度は高いことが窺えた。ただし、利用に際して、ある程度強力な FD の推進とサポートスタッフの手配を前提としており、これらが円滑な導入・運用のキーポイントになる。また、投票システムの利用は成績評価に利用するのではなく、むしろ相互レビューのためであること、あるいはレポート群の荒い構造化にあること等を意識して利用することが肝要である。

謝辞

本研究では、NLS3、特に投票 SS の開発については、学術創成科研費研究課題『コンピュータ・ネットワークを用いた法学教育の実践・評価システムの創成』の一貫として進められてきた。さらに、NLS3 の実験・運用に当たっては、文部科学省法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム『自分の技量を随時確認できる多様な環境構築』プロジェクトの援助を受けている。

参考文献

- [1] Fukaya, Y.: "Effects of peer-reviewing process of college students' Writing", The joint workshop of cognition and learning through

media-communication for advanced e-learning, September 8-9, pp.69-72 (2003)

- [2] 加賀山茂・松浦好治: 法情報学(第 2 版), 有斐閣 (2002)
- [3] 里中忍 他: 学生の投票による教育評価・改善の試み, 工学教育, 51-6, pp.64-70 (2003)
- [4] 中島英博 他: 「ゴーイングシラバス」を通して見える新しい授業空間, 名古屋高等教育研究, 3, pp.67-81 (2003)
- [5] 名古屋大学法科大学院形成支援プログラム: <http://nls.nomolog.nagoya-u.ac.jp/pr01.html>
- [6] 佐伯胖: 決め方の論理, 東京大学出版会, I~IV (1980)
- [7] 柴田好章・小川亮: 相互評価システムの開発と大学情報科目における利用, 日本教育工学雑誌, 25, pp.33-38 (2001)